警鐘レポート7　小児の急性腹症に関連した死亡
事例4
＜事例概要＞ ・幼児期の患児。腸重積術後。間欠的な腹痛と腹部膨満があり、近医を受診し浣腸を実施。嘔吐が続き、翌日に他院を受診。超音波検査で腸管拡張を認め、夜間に外来受診。 ・Ｘ線で著明な腸管ガス像を認め、浣腸を実施し、軟便あり。嘔吐と間欠的な腹痛を認め、絶飲食とし、輸液を開始。胃腸炎による麻痺性イレウスを疑い入院。受診から約8時間後、頻回な嘔吐と水様便、腹痛があり、医師へ報告。再度浣腸を実施し、水様便を確認後、腹痛は消失。翌朝、顔色不良、傾眠傾向となり、超音波検査で腸重積は否定。造影CTで小腸の拡張と腹水、および血液ガス分析でアシドーシスを認めた。胃管を挿入時に胆汁性の嘔吐あり、その後心肺停止となり、受診から約17時間後に死亡。 ・死因は、絞扼性腸閉塞疑い。解剖有、死亡時画像診断（Ai）無。